



Bengaluru → Surat

意思を持つクラクション。

ついにインド・東南アジアパートの走破が始まった。走破メンバーを乗せた9台のクルマがベンガールのTKM (Toyota Kirloskar Motor Private Ltd.)工場からニューデリーに向けて出発した。初日はマディケリへ。インドと日本では文化や交通ルールが大きく異なる。メンバーたちは、インドの交通事情に少々戸惑いがあるようだった。数キロごとに状況が変わる路面、強引な追い

越し、不意に横切ってくる人や動物(犬、ヤギ、馬、牛)。キャプテンを務める先進車両開発部の佐原義一は「職層や国籍の違うメンバーとなんでも話せる関係を築きたい」と言う。インドの運転について問うと「クラクションに感情がある」と笑う。音に「追い越すよ」「俺が行く」などの意思がある。意思を知ればクルマ同士の「対話」に聞こえるから不思議だ。

マディケリからダバングレへは狭い山道、街中、田園地帯を通る。気候も激しく変わり、一日の中に四季が詰まって

いるかのようだ。統括部生産技術室の井上孝次は「故郷の鳥根県隠岐島も牛が歩いていました」と笑う。彼はインドの混沌に順応しつつあるようだった。「インドはひとつの道に、速度やサイズの違うモビリティが混在している。ポットホールやスピードブレーカーも多いし、信号や白線がほとんどありません。専用道路が少なく、拡幅工事のために未舗装道路も多い。だけど、運転しにくいはずなのに、成り立っている。それは共通の考えに基づいた振る舞いがあるからだと思

じます」。ドライブトレーニングの際、「日本人は“You First”だが、インドでは“Me First”だ」とTKMのトレーナーから聞いていた。多様性に満ちた環境の中では、自己の意思を表明することが何よりも大切で、ドライバーも歩行者もその意思を互いに尊重し合う。井上は混沌としたインドの環境の中に、秩序を見出した。

いつかクルマを届ける人に。

コールハープルへ向かう道で、走破メンバーは初めてインドの高速道路を利用した。高速道路ではあるが路肩を逆走するバイクやオートリクシャー、道路を歩く人、馬や牛もいる。堤工場組立部 第1組立課の佐藤亘はこの混乱を楽しんでいるような印象を受けた。インドではシェア 50% を誇るスズキのクルマをよく見かける。「コンパクトでリーズナブルなクルマがインドでは求められてい

るのでしょう」。しかし、小型で安いだけでは、インドのタフな道を走り続けることはできない。「コンパクト性に加え、操作性と加速性も必要。特に交差点や高速道路では、急に加速が必要なことがある。あと、インドの人が気にするのが燃費。ハイブリッド自動車の可能性は高いように思いますね」

コールハープルからナビ・ムンバイの道は、ほぼ高速道路を利用した移動だったが、逆走するバイクを見ても、誰も驚かない。「インドは日本の物差しでは計れないが、その中には培われたぶれ

ない筋がある。それは多民族国家という背景が関係しているかもしれない」と、パワートレーン製品企画部の油井淳は言う。油井は AI(人工知能)の可能性について話し出した。「相互情報交換型 AI をこの地で鍛えれば面白いのではないかと思う。例えば前を走るクルマや以前の走行データから路面状況を学び、AI がショックアブソーバーに働きかける。そうすれば、減衰力調整をして揺れの少ない、静かな車内環境が実現する」。AI の出現は運転の楽しさが失われるのではという議論があるがと問うと、油井は





首を振る。「AI が進化すれば、クルマの成長を楽しめる。それこそ、豊田社長の言う“愛車”です。クルマに新しい楽しみが加わるかもしれません。それに、インドで鍛えれば世界中どこでも走れそうですね(笑)」。

血の通ったコミュニケーション。

走破メンバーは国道 48 号線 (アジアハイウェイ 47 号) を北上し、スラトへ向かう。インドの雨季は 6 月～9 月だが、この数日は激しい雨に降られている。激しい雨が視界を遮るため、ヘッドライトやハザードをつけ、時に 40kph 程度の速度で道を進み、スラトに到着した。

5 大陸走破メンバーには技術職、技能職に就いているメンバーが多い。渉外広報部の大島翔太の楽しみが、彼らと共にディスカッションをする走破後の

デブリーフィングなのだそうだ。「メンバーにはプログラミング、エンジン、ノイズなどを担当する人がいる。ディスカッションでは専門的な知見を得ました。それが最大の収穫です」。大島は常日頃から「現場が何を思っているのかを伝えること」を課題にしている。今後もさらに現場を学び、技術系や技能系の人たちとも対話を繰り返す「血の通ったコミュニケーション」をしたいと考える。「5 大陸走破を“ツーリズム”として見ている人がいるかもしれない。しかしそれは全く違い、5 大陸走破を経験したトヨタのクルマは、さらにいいクルマになるぞと言えます」と、物静かな大島が強い口調で言い切った。今回の体験は、大島の仕事をより血の通ったものにする事だろう。そして、乗り物の楽しみを伝えるものになるはずだ。来週、チームは 5 日間かけてニューデリーへと向かう。



距離：1,549km
 期間：2019.9.16-20
 日数：5日間
 車両：Innova Crysta、Fortuner、Camry HV、Innova Touring Sport、Glanza、Yaris、Land Cruiser 200、Suzuki Vitara Brezza、Corolla Altis